

ティリッヒとカント

- 近代キリスト教思想の文脈から -

京都大学 芦名定道

<内容>

- 1 問題設定
- 2 ティリッヒのカント論の概要
- 3 カントと宗教哲学の可能性
- 4 展望

<ポイント・引用>

1 問題設定

1. 「ティリッヒとカント」というテーマ：

(1) 「神学と哲学」、(2) ドイツ・プロテスト神学とドイツの古典的哲学（カントおよびドイツ観念論）、(3) ティリッヒのカント論

2. 近現代のキリスト教思想の文脈においてカントの影響

Dietrich Bonhoeffer, *Akt und Sein. Transzendentalphilosophie und Ontologie in der systematischen Theologie*, 1931

3. W. Pannenberg, *Theologie und Philosophie*, Vandenhoeck 1996

4. 宗教思想という観点から見たカント哲学の多面性

2 ティリッヒのカント論の概要

5. ギムナジウムの学生時代のカント（『純粹理性批判』）と出会い

6. 後期シェリングに関する博士論文：神秘主義と罪責意識（同一性の原理と断絶の原理）の緊張関係とその統合という問題設定 = 「カントとスピノザの総合」

7. 多面的なカントの全体像の議論（カント論1）：初期ティリッヒにおけるシェリングについての博士論文、後期ティリッヒのキリスト教思想史講義

8. 神の存在論証との関わりでのカント、宗教哲学の可能性という点に集中したカント解釈（カント論2）：前期のマールブルグ講義、後期ティリッヒの『組織神学』

9. (1) 人間存在の有限性を論じ、神の存在論証を批判する批判哲学におけるカント

(2) 人間理性にとっての無制約的なものという理念の意義を論じるカント、ドイツ観念論へと展開するカント

3 カントと宗教哲学の可能性

10. カント以降、神の問い、超越の問いはどこから始め得るのか。

11. 神認識の可能性（超越への道）すなわち、宗教哲学の可能性

(1) 宇宙論的類型：経験的事実（感覚経験）からの推論によって神に遡及する

(2) 存在論的類型：「人間は神を発見するときに、自分自身を発見する」、無制約的な

12. 「神の存在」「我々の精神の中における神の現臨」は「あらゆる思考の前提」であり、存在論的類型は、宇宙論的類型を含めたあらゆる「宗教哲学の基礎」である、「神は存在そのものである（deus est esse）という命題は、あらゆる宗教哲学の土台である」

13. 神の存在論証の解釈：無制約的なもの（実定的な宗教の宗教的象徴としての「神」ではなく、思惟する自然 = 心、世界概念一般とどのように純粹理性の理念としての神）は、確かに合理的な存在論証の事柄ではない。しかし、人間の合理性あるいは有意味性自体

が成立する（根拠づけられる）ためには、無制約的なものが要請されねばならない。

14. 「理性が要求するところの無制約的なものは必然的に経験と一切の現象との限界を超えることを我々に強要する」(カント)
15. 宗教哲学の可能性：経験の一対象としての「神」ではなく、経験自体の構造において直接的に現前している無制約的なものについての気づき(awareness)。人間の存在自体における超越的なものへの開けの可能性。 具体的な実定的宗教
16. 伝統的に神の存在論証として展開されてきた議論は、神の存在についての論証ではなく宗教哲学の可能性(神の問いの可能性)として解釈できる。
 - ・「神の存在の論証ではなく」：カントの批判哲学のいわば消極的影響
 - ・「宗教哲学の可能性として解釈できる」：カントと存在論的類型との関わり
17. 「宗教哲学の道徳的類型(カントのいわゆる道徳的な神証明にさかのぼる)は、一つの新しい類型を現しているとしばしば言われてきた。しかし、実情はそうではない。道徳的論証は、宇宙論的に、あるいは存在論的に解釈されねばならないのである。それが宇宙論的に解釈されるときには、道徳的判断という事実が、最高存在に至る推論の基礎となる」(Tillich[1946], pp.294-295)、「道徳的論証が存在論的な仕方では解釈されるときには、道徳的命法がもっている無制約的な性格の経験は、直接的に、推論によらず、絶対的なものの気づき(awareness)となるのである」(ibid.,)。
18. 「カントも同様の仕方では、倫理的内容に関する相対主義が、倫理的形式、すなわち定言的命法に対する絶対的尊敬と、倫理的命法の無制約妥当性の承認とを前提としていることを示した」(Tillich[1951], p.207)、「この点までは、カントもアウグスティヌスも反駁され得ない。というのも、彼らは論証していないからである。彼らはただ実在との出会いすべてにおける無制約的要素を指し示しているからである」。

4 展望

19. 意味論(意味の形而上学)と人間学(基礎的存在論)としての展開
20. カント以降の近代の宗教論の系譜を再検討から、さらなる宗教論の可能性を探求へ

<文献表>

1. 初期ティリッヒにおけるカント

1912: *Mystik und Schldbewußtsein in Schellings philosophischer Entwicklung*, in: *Paul Tillich. MainWorks 1*, pp.21-112

2. 前期ティリッヒにおけるカント

1925-27: Werner Schüßler und Erdmann Sturm (hrsg.), *Paul Tillich. Dogmatik-Vorlesung (Dresden)*, in: *Ergänzungs- und Nachlaßbände zu den Gesammelten Werken XIV*, De Gruyter 2005

3. 後期ティリッヒにおけるカント

1946: *Two Types of Philosophy of Religion*, in: *Paul Tillich. MainWorks 4*, pp.289-300

1951: *Systematic Theology. Volume One*, The University of Chicago Press

1963: *A History of Christian Thought* (ed. by Carl E. Braaten), Paperback Ed. Simon & Schuster 1972

4. 芦名定道 『ティリッヒと弁証神学の挑戦』創文社 1995年、とくに252-264頁